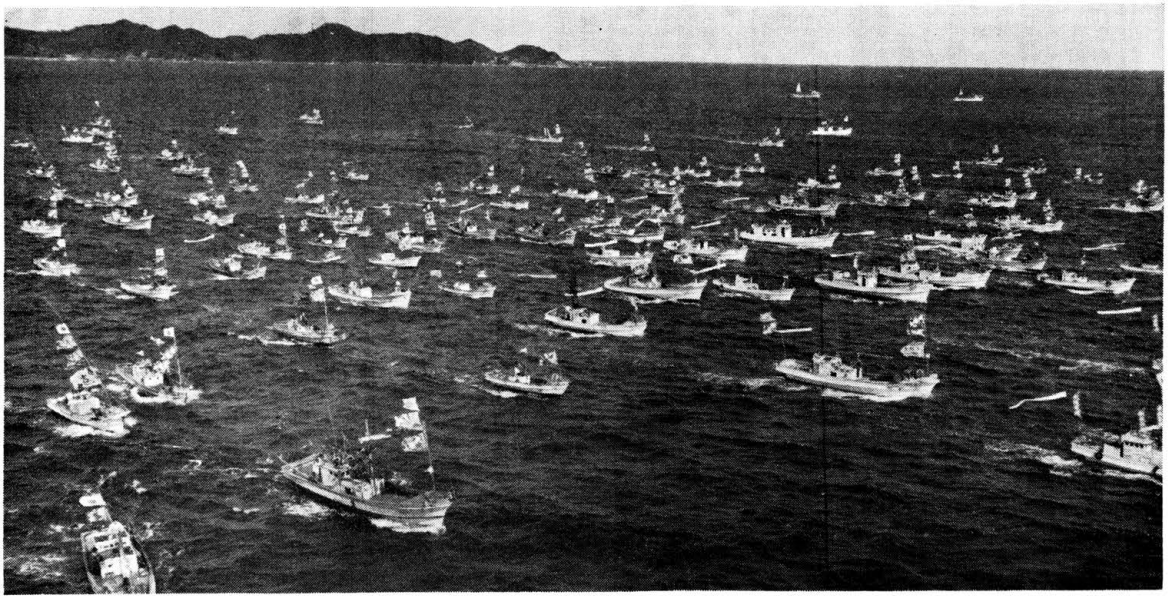
宗像

毎月一日発行
定価一年送料共500円
発行所
宗像大社社務本局
福岡県宗像郡玄海町
電話 神湊26番



（西日本新聞社提供）

紺碧の空と海に国家鎮護と海上安全を祈って

宗像大社御用達
神輿祭神装束具
松島神輿製作所
京都市下京区北小路通新町西入
電話 (37) 八八六九番
振替口座京都一五八九一番

花やかに"みあれ祭"ペーゼェント

宗像七浦２００隻の大船団

九月二十三日、恒例の御生祭がとり行われた。夜半頃に豪雨があって天候が気づかれたが、夜明けと共にその心配も吹き飛んだ。

残りの雲が相当の早さで飛び去る中に朝日が輝やき出た。

大島港には宗像郡の各浦から馳せ集った漁船が続々とつめかけて来た。何れも船首に大社頒賜の浪切御幣をつけている。このほかに思い思いの満船飾をほどこしているので、それらが風にはためいて美しい。さしもの大島避難港も満ち溢れる様な沢山の漁船のエンジンで一大轟音となった。

八時、大島中津宮に於て「出御祭」が開始された。合図の花火が晴れ上った秋空に爽快な音を響かせた。

祭典が終了し、沖津宮の神璽筥を小野権宮司が、中津宮の神璽筥を宇都宮祢官が捧げ持って大島波止場に向った。沖中両宮奉賛会長、副会長、村長、漁業組合長他多数の人々がつき従った。

波止場には既に七浦からの漁船群が待機している。花火の轟音三発がこだました。

秋晴れの玄界灘に、先導船、御座船、供奏船が各二列に二十四隻並ぶ、その両側を各七一八列に十三隻ずつの随行船がとり巻いた。

いよいよ海上神幸の開始である。今日の玄界灘は真東の風が可成り強く波浪が高い。五トンから十二トン位の漁船は夫々波頭を切ってつき進む。満船飾の旗が風にはためいて勇ましく鳴った。御座船の「国家鎮護宗像大社」と大書した大幟が一きわ白く光って見えた。

船団は全船四ノットの速力に規制され、ゆっくりと東南方の地ノ島に向った。と、飛行機が三台飛んで来た。超低空である。よく見ると各新聞社社機らしい。御座船の前をすれすれに飛ぶ。十六ミリのネジを巻き乍ら撮影の準備をしているのが手にとる様に見えた。

飛行機は何れも船団の前にさしかかった時に翼を振って挨拶をした様に見えた。それから後はさながらの乱舞である。海空一帯となっての大ページェントが繰り広げられた。

船団は地ノ島の沖をつき進み、やがて鐘崎の町並が見える位に近接し、そこで大きく右折した。

ふと見ると、御座船一号（沖津宮）の明神丸には、宗像郡漁業協同組合連合会長兼水難救済会連合会長でもある永島金作氏が毅然として立っている。七十才の老令にもかかわらず、今日の晴れの日に一隻の事故船があってはならないという責任感からであろう、前後左右をぐるぐる見廻し乍ら立ちつくしている。曾て四百年の昔、九州中国はいうに及ばず、朝鮮支那大陸に迄その勇名をとどろかせた"宗像水軍"がここに再現された訳である。永島氏はさしずめ司令長官、というところか。

御座船第二号（中津宮）は第一号の左側に約三十米の間隔をとってぴったりとついてくる。船団のすべてが相当のうねりに上下して揺れている。海神の神幸にはまことにふさわしい海上の状況であった。

沖中両宮奉賛会長河辺嘉十郎氏に「こんな波でも、みんな、よく参加してくれましたね」といったら、河辺氏が大きな声で笑った。

「玄海の漁師がお神様のお供をするんじゃけん」

鐘崎の鼻で右折した船団は江口の沖を過ぎ、やがて神湊に近づいた。波止場や海岸に群った人波が見える。この辺で飛行機と別れた。

神湊に到着、報道船に同乗していた花火師が二発打ち上げた。どっと波止場の人たちがどよめく。先導船に導かれて御座船が神湊港壁についた。

神璽を捧げ持った神職が上陸。直ちに神湊の御座所に向った。沿道に土下座した高令者たちが手を合せて拝んでいた。神湊の町は全戸の丸をあげての歓迎である。

十時半、神璽は無事に神湊浜の御座所に御到着。さきに久保宮司が捧持して御迎えに見えた辺津宮の神璽と合せて、沖、中、辺津宮三宮の神璽がここに御揃いになった訳である。

続いて着御頓宮祭が厳かに執行された。

「――敷座せる大海原を、御長手吹き靡かせ、御座船の御前御後に御供仕奉る諸船は、百八百の数を尽して馳せ集り、千万の旗風を孕みて伊佐き渡らい――」

久保宮司の感激の祝詞が奏上された。

三宮の神璽は夕刻迄御駐輦された。神湊地元の人たちの献身的な御奉仕によって、御座所の儀も滞りなく済み、五時、自動車の鹵簿を連ねて出御。五時半、辺津宮に無事入御遊はされた。

かくて放生会の前奏曲としての復活第二回目の御生祭も盛大に終了したのである。

誰かが「神様の御命令でなければ、こんなに船を集める事は出来ない」といったのが印象的であった。

同日の夕刊には、西日本、朝日毎日、フクニチ共に四段抜きで「宗像水軍の再現」と報道した。

御神徳と御社運の隆昌を示すこの祭儀は、信仰篤い神郡の人々によって益々盛んになるであろう。

御礼

当社の古儀「みあれ祭」復活第二回目の神事を斎行するにあたり、昨年に倍する御高配を賜り、ここに恙なく斎行出来ました事を厚く御礼申し上げます。

昭和三十八年九月
宗像大社社務本局

宗像郡漁業協同組合連合会
宗像郡水難救済会連合会
宗像郡交通安全協会
出光興産株式会社福岡支店
岡崎工業株式会社
宗像郡タクシー業組合
神湊旅館業組合
神湊観光協会
神湊商工会
ほか関係各位

阿蒙少言

冷蔵庫の注文をつけた店員が、アパートにとどけた「外から大きな声で名前を呼んで下さいとあれだけ言ったのに」と叱られた。洗濯機や冷蔵庫は大声をあげてアパートに持参すること、これが店員学第一課と承った。商業学校では虚栄心理学は教えてくれない○秋色の小庭、夕食後のある風景、セキセイインコを見ていた子供「鳥でもお母さんの方が太っているネ」答え「あらゆる動物のお母さんは胃袋が強いのだ」○せっせと働いて財産を造る、ドラ息子が浪費一途、はかなく消えた銀華一朝の夢が耳の痛い様々な格言を遺産とした「売家と唐様で書く三代目」古今東西変らぬ有為転変の輪廻だ。誤ってドラ息子を育てたら売家の広告以前に公益事業に会附の申込みが肝心○家堂や塀廻りの修理が娘の適齢期を告げる。深夜家をまちがえて何度も近所を起した呑兵衛氏がこの頃酔歩蹣跚の上機嫌を見せなくなった。娘の婚期はおやちの徳利を制圧する○落書は公徳上賛成したものではないが、中にはほほえましい雅味のある一句を見出すことがある。落書は楽書に通じ、その元祖（？）はウイットに富む江戸時代の町家流がひそかに政治に対するウップンを晴らした落首に始まると思える○この世をばいざおさらばに線香の煙となりてはいさようなら」は弥次喜多の漫文で有名な十返舎一句の辞世と伝えるが、浮世を茶化した生活態度は禅味を持つ。放屁一発、裁判所長よ、屁帝を投げ下され、これは法廷に於ける声の落書○涼風さやかな、少々難しい文句で締めくくりをつける。東洋哲学の師の言葉に通じ、任の実践に到る。仁を訓えた孔子、恕を説いたナポレオン、任を命とした大石。秋は思索する。（白雲）

第三回 宗像大社献詠歌会詠草

九月八日　於社務所詠草到着順

大濠　江崎　琴子
文月にうろひそめし桜木の庭木に石に蕾葉ちりしく

神湊　隣船　俊
炎天の庭をいちって涼しさや煙草ふかして木蔭に憩ふ

香椎　織田　橡雨
かむなびの樹々もる風のすがしさに秋のる蝉のとゑをきくかも

村山田　吉田佐一郎
すぐれたる景色を詠んと勇み来し九十九島も雨に空しき

大濠　広田美津子
吹きあたる風はくだけて四方にちる屏風峡のここしき岩よ

（北海道）
陵厳寺　真鍋　万三
ともすれば主みがちなる我が心磨きあげなん大社の威稜に

岡垣　早川藤九郎
高倉の宮に詣でれば水かは清水湧きつつ砂ながれをり

福岡　高橋　昇
年ふれば瓦も光る宝物殿子々孫々の道の標に

小倉　大和　虎雄
ことくと客馬車走る往還を生年我は歩みて参りし（放生会）

名残　竹原　円
大阪と姫路の子にも知らせむと家売る便り書くは淋しき

戸畑　田中ハッセ
明け方のはげしき雷雨気にやまず参籠殿に泊りし我は（大島中津宮）

福間　井原　元彦
炎天の暑さをさけて女労者萩竹桃の蔭に憩へり

内浦　長畑　房江
軒の蔭生芳の畝に延びし頃寝台の上漸く涼し

宮田　片山　一
万象はただ慮しく箱に佇つ雲海のはてに朝日耀よふ（富士山頂）

勝浦浜　永島　文子
手不足の過労がなせる後影老いの目立てる父のこの頃

沖ノ島　前田裔之助
あかねさす夕光の中に石工見えてハッパの音の勇ましかな

戸畑　伊規須ゆき
神域に天上界を生み成せる詩の島大島ふるさとの島（中津宮七夕社）

朝町　井上陽之助
すがくし夕立さりて庭先にはとのをり来て孫ら豆まく

江口　辻野　開造
こぞまでは仲睦ましくありけるが新盆迎ふ君ぞ偲ばる

大島　戸畑　山磨　昌子
母を見舞ひ共に針医の治療つくる艶となりて話の合ひぬ

福間　中村　吾郎
笊に二つ收めて多き豌豆を剥きつつ妻と夜を更かしをり

吉田　占部　由久
秋立ちて夕べすずしく庭の面にはやなき初めぬ虫のいろいろ

津屋崎　麦野　時雄
二人きりの大学生の孫夏休み祖父母訪ね来て六日泊りぬ

勝浦　永島　計七
久々に樫に射し入る日さしにも静かに秋のしのび寄る見ゆ

田島　深田よし子
参詣も絶えて風なき夏木立灼女の袴に陽はかげりゆく

南郷　中村　幸
中空を西に尾をひき流星は指さす間なく消えてしづもる

門司　永島　哲夫
岸壁を噛む高潮を見下して工事現場の足場踏んばる

東郷　安部　重郎
東京より来し子供等は蝉盛捕りめだか捕りにて日も足らぬこと

〃　安部　静子
厨べにふと水仕事やめ聞く虫の音清らにてしばし聞きゐつ

田島　吉武　俊次
同窓会好々爺あり媼ありて五十年振りの再会弯ぐ

力丸　登
人の仕事見てゐてやすしと思ひしに己がまねごとむつかしくあり

箱崎　古野　倫子
送り火のけむり消えゆく西の空あかねに染みてあきつ飛びかふ

宮田　片山　朔子
大半は貧金もとれぬに早や数も少くなりし西瓜出荷し合ふ

吉武　高山徳七郎
秋立つも白色の花つまつぎに咲きつづき居り垣根のむくげ

東郷　藤崎　辰子
学究の道を捧びし子の室は木立めぐらし蟻多しと云ふ

〃　小野角次郎
初盆会夏休み吾れ故郷にあり人足繁くおとなひ来るも

〃　小野　花居
夏草の茂りにまかせ吾が庵閑なくに庭を清めて

宮田　北原きみ子
代かきの耕耘機鳴る中にして牛追ふ人の声もさだかに

東京　永島　潤
豆腐売りのラッパ吹くすべ身につきぬ巣立ちし春の百日過ぐれば

論説

六十年の豊作

設題

――悪妻は六十年の不作という――

――否

これからぬかそ女房の功徳を語る。そして六十年の不作を豊作に変える心算を述べたい。

× × ×

仕事の都合で折句知名士の奥さんと顔が会う。その瞬時の間にこの男方の外交辞令とその風貌を資料に、良妻悪妻の判定を下すことは甚だ困難な問題である。他人の家庭に一歩の妻があっても、亭君の姿が現れても、いささかも直接の衷欲とはならないが間接的には大いに影響が感じられる。

悪妻は凡そ賢母ではない。不良の子を育てた母親は概ね妻の座においても悪妻の部類に入る。しとやかな良い嬢ちゃん、元気だが無邪気で少しも高ぶらない男児が現れた高級家庭は、文句なしにまた見め美しい奥さんを良妻賢母と判断する。お手伝さんの物腰も同じ資料と心得て大差はない。

次は面接、偶然話材が先方の得意の点に触れた場合と、先方の誘導により知らずくに得意の壺にはまり込んだ場合との別はあるが、雄弁の銀妻は何も彼も言いつくしてこちらの口を開けさせない。沈黙の金妻と化に屈たら、まさに舞台裏のハリコの捨て石にひとしい光景である。これが六十年の不作と言われてもわかるまい。

優れた男性は事業に没頭する。これを妨げるものが不作の銀妻であることは少くない。銀妻を擁して尚かつ隆々たる事業面の輝しい業績をあげる人物は自ら以上の傑夫であろう。沈黙の金妻を配していたら一介の平侍から一国の城主をから得た山内一豊の業績以上のものを史上に残すことになったと言える。安っぽいワイフより糟糠の妻に婦性の軍配が上がることは、古今を問わない。

封建思想が生んだ言葉だろうが、良妻賢母があって良夫賢父はない。男性悪く良夫でありやがて賢父となる道理もない。悪夫愚父である。処世上の多くの苦悩も家庭に持ち込まないまま事業の育成に生涯を賭けて死ぬ人である。史上に名をとどめた傑出の人物も、眼光紙背に透る史家の穿鑿及ばぬ秘事を事業の過程にとどめている。誰もわからない仕事、それが男性の一生の珠玉、沈黙のベールに秘した名剣である。内助者はこれを知らぬまま黙って居城たる家庭を守ることに徹する。良妻の名も賢母の誉も考えることなく。

結極ぬかみそ女房に始って、だんまりやのお人好し婆さん終れとさかさま言うのか。然り。女性の真の幸福はその中にある。ぬかみそ女房になっても利巧なワイフになる勿れと極言したい。

最後に附言する。先日ある中年女性を交えた数人の席上で「宗像の女性は忍耐力の強い方が多いそうですが如何」答えは簡単である。歴史が作ったもの、それは名もなき妻として知られぬ内助者の功績である。

× ×

秋の大祭をひかえて 氏子総会

九月十日、秋の大祭である放生会と間近に迫まった「みあれ祭」についての打合せの為、恒例の氏子総会が清明殿にて開催せられた。午前十時、社務所に於て評議員会が開かれて、氏子総会に提出される諸案について忌憚なく意見が述べられ、十一時過ぎより清明殿に於ける総会で審議された。

就中、みあれ祭については、昨年に引き続いて第二回目を迎える事となったが、本年は、沖津宮の御霊代と中津宮の御霊代を大島より神湊まで海上渡御し、神湊海辺に地元神湊観光組合等関係者の協力によって御座所を造り、十時より午後五時まで御鎮座する事になった事、沖津宮、中津宮の二宮をお迎えする意味で、辺津宮より御霊代を奉持し、神湊御座所にて三宮そろって御鎮座する事になったと神社側より説明があって一同これを了解した。

続いて放生会の祭典、神賑行事としての流鏑馬、風俗舞、郡内六中学校対抗試合が行なわれる。

祭典には、稚児装束を着用しての一舞舞」が奉納され、風俗舞、浦安舞もいろどりを添える。殊に氏子会からの奉幣行事が斎服姿の代表によって行なわれるのは、大社と全郡氏子との密接な神縁を表現するものといってよく、意義深いものがある。

奉納相撲は昨年から始まった郡内六中学校対抗試合が行なわれる。

これである。この日は慣例によって学校官公衙は休みとなる。場内には数百軒の露店が処狭しと立並びサーカス、見世物小屋等が立って賑わいを称える。三日間とも郡内外の参拝者が農集する。神賑行事としては豊作の予祝を意味する流鏑馬が伝統さながらに妙技をふるう。

秋季大祭祭典次第

九月二十三日御生祭

海上渡御

十月一日　秋季大祭
午前八時高宮　午前十時総社
風俗舞　浦安舞
二日　秋季大祭
午前十時総社。風俗舞。浦安舞。午後献茶式
八日　表千家家元献茶式

宝物館杭打ち工事

先号で報じた通り、当社の一大事業である宝物館建設工事は、先月起工式を行って、建設工事に第一歩を踏み出した。建設地域一帯は昔は海域であり、つい先頃迄は田地であった為、地弊が軟弱な宝物館を其まま建設する事は無理な事がわかった、この為土台を設置する為杭打ちを行なう事に決定、先頃から大同コンクリート（株）の手に依って杭打ちを敢行、九月十五日杭打ち工事を終了した。杭はコンクリート杭で直径三十糎、長さ八米余りのもの凡そ百二十本、宝物館の設計によって一カ所に打たれる杭は三本から五本とまちまちである。この杭を中心として、基礎がつくられ、この上にコンクリート杭が伸び、その上に宝物庫が建設される事となる。

十月祭事表

一日　放生会大祭
←
三日　毎日午前十時

当社最大の祭事。貞元年（976）の昔から九百八十余年の伝統をもっている。有名な「むなかたまつり」「田島放生会」というのはこれである。

九日　織幡神社秋祭

玄海灘鐘崎に鎮座される田島織幡神社の秋季大祭。当社より職員が献幣する。

一二日　的原神社秋祭

宗像郡八並に鎮座される田島的原神社の秋季大祭、当社より職員が献幣する。

一七日　神宮祭遥拝式

午前十時

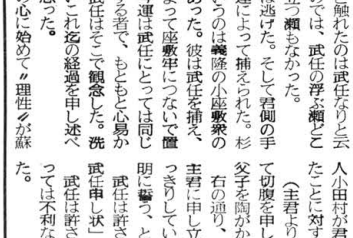
わが国の神社の宗祀とも云うべき伊勢に鎮座せられる皇大神宮の神嘗祭――新穀感謝祭――にあたり、遥拝式を行う。

十月の交通訓

◎踏切に注意！

社務日誌抄

八月三日　中和建設㈱宗像宝収蔵庫屋根葺き替え工事。
八日　尼崎市大物主神社へ分霊奉遷職員三名奉仕。
一三日　福岡久留米土木所長来社。
一五日　月次祭斎行。大阪市赤間一夫氏来社。
一八日　糸島郡神職会七名来社
二〇日　宗像土木事務所長能谷信司氏新任挨拶の為来社。県庁施設課長、林組社長外数名沖島工事の件につき来社。
二二日　山内光春氏来社。
二三日　宝物館建設用地電柱移転工事始まる。
二五日　中津宮祖霊祭斎行。
二九日　宝物館建起工式執行
修獄館高校教諭外数名沖の島調査
植物持参奉納。飯塚市教育長大村虎雄氏他二名宝物館建設資料調査
取材の為来社。
三〇日　みあれ祭打合せ協議会福岡相互銀行吉野支店長参拝。
三一日　定例職員会議。山口県神社庁長上井晃氏他二名来社。
九月一日　月次祭斎行。熊本大学泉四郎助教授来社。
二日　表千家同門会二名、放生会献茶式打合せの為来社。
四日　出光興産㈱宗像支店長春田義一氏新事務所に御分霊奉戴の為来社。
六日　粕屋郡立花小学校父兄五〇名、田川郡添田町高木神社宮司他数名来社。
八日　宗像警察署長参拝。
一〇日　福岡学芸大教務課長他一名、分校起工式依頼の為来社。
一一日　放生会風俗舞練習。
一二日　文化財保護委員会第一回委員会開催。
一三日　芸術院国立修理所長他数名来社。農村青年研修館落成式、小野種宮司出席。
一七日　清水建設㈱藤課長来社
一九日　夕刊フクニチ事業部長、KBC事業部等九名来社。



放生会ポスター

放生会のポスターが出来上った。西鉄の御好意で製作されたもので、赤、白、黒の三色。写真は放生会の正面参道の露店と、その賑わいを写したもの、ポスターにある通り、郡内各所から臨時バスが増発され、昨年に増す賑いを呈する。

武任の申し状 (三)

陶謀叛の心ありとは、自分に浅はかであったが、実の張本人は杉重矩であった。

重矩は主君に「申し状」を書いた。これ迄の経過を見れば謀すること武任の心は乱した。彼がこうして在任在任している間にこの様な成行きになって行くのか、事態は見当がつかなくなっていた。彼は武士であったけれども〝恥を知る〟為に切腹してでも主君に謝することができる程の男ではなかった。男である以上、少しは世の中と自分の立場を見廻すべきであった。しかしもう遅かった。事態は変化していたのである。

杉重矩は「陶謀叛の心あり」と主君に讒言したものの、陶と直接事を構えることの不利を悟らぬ程馬鹿ではなかった。武任がうろうろしている間に、重矩は陶に全然違うことを申し入れたのである。

「一言申し入れる。武任が豊殿のことを御主君に対して悪しざまにいいふらしている。御用心さるがよい」

事ここに至っては武任立つ瀬は全く無いものといってよかった。その上、重矩の手勢が武任の家に武任討ち取りに向ったという。

武任はこれをどう解すればよいのか分らなくなってしまった。さきに後難を恐れるの余り重矩に対して

「向後は自分は陶とのとは友誼関係を絶つつもりでござる」

と云った事があったが、そんなことが杉に利用されて、今更主君に陶を讒言した張本人が陶に謀叛心ありと触れたのは武任ばかりと云われたのでは、武任の浮ぶ瀬どころか、立つ瀬もなかった。

武任は逃げた。そして君側の手勢杉与運によって捕えられた。杉与運というのは義隆の小座敷衆の一人であった。彼は武任を捕え、君命によって座敷牢にないで置いた。与運は武任にとっては同じく近侍する者で、もともと心易かった。武任はそこで観念した。洗いざらいこれ迄の経過を申し述べようと思った。

武任の心に始めて〝理性〟が蘇ったのである。

陶謀叛の心ありとは、自分の武任の心は乱した。彼がこうして在任在任している間にこの様な成行きになって行くのか、事態は見当がつかなくなっていた。彼は武士であったけれども〝恥を知る〟為に切腹してでも主君に謝することができる程の男ではなかった。男である以上、少しは世の中と自分の立場を見廻すべきであった。しかしもう遅かった。事態は変化していたのである。

杉重矩は「陶謀叛の心あり」と主君に讒言したものの、陶と直接事を構えることの不利を悟らぬ程馬鹿ではなかった。武任がうろうろしている間に、重矩は陶に全然違うことを申し入れたのである。

「一言申し入れる。武任が豊殿のことを御主君に対して悪しざまにいいふらしている。御用心さるがよい」

事ここに至っては武任立つ瀬は全く無いものといってよかった。その上、重矩の手勢が武任の家に武任討ち取りに向ったという。

武任はこれをどう解すればよいのか分らなくなってしまった。さきに後難を恐れるの余り重矩に対して

「向後は自分は陶とのとは友誼関係を絶つつもりでござる」

と云った事があったが、そんなことが杉に利用されて、今更主君に陶を讒言した張本人が陶に謀叛心ありと触れたのは武任ばかりと云われたのでは、武任の浮ぶ瀬どころか、立つ瀬もなかった。

武任は逃げた。そして君側の手勢杉与運によって捕えられた。杉与運というのは義隆の小座敷衆の一人であった。彼は武任を捕え、君命によって座敷牢にないで置いた。与運は武任にとっては同じく近侍する者で、もともと心易かった。武任はそこで観念した。洗いざらいこれ迄の経過を申し述べようと思った。

武任の心に始めて〝理性〟が蘇ったのである。

宗像四郎氏貞 (八)

山下半可 作
福田長庵 画

絆 (十)

これより先、陶隆房は天文十四年尾張守に任じ、天文十年には手勢の軍備を整えた。しかしこれとても武人のたしなみであって、世上兎や角云われる筋合いのものではなかった。

それにも拘わらず、近頃の彼に対する風評は善ばしからぬものがあった。彼は彼なりに〝謀臣というものはつらいものだ〟と思っていた。所が今年の正月に自邸に於て内藤興盛や杉重矩らと会談した事から〝妙〟にこじれ出した様に思われた。内藤らに思わせぶりな事を云ってしまったことを今になって後悔しているのが隆房の心境であった。暗々裡に主君に対する自戒の効果を狙って発言したことが、君側の佞奸に持って廻られ、剰つさえ筆頭家老までが策動するとはー。

小春日和の昼の縁側で彼は唇を噛んでいた。と、老婆の声がした。そこへ寺内治部が入って来た。

「殿、妙な噂が立っておりまする様で―」

「何じゃ、治部か、申せ」

隆房が向き直った。今さきの老婆の声などは彼の念頭から消えていた。厳しい目付である。治部の顔がこわばった。

「実は噂どころの沙汰ではございません」

「何と！」

「は、はい、誠に以て妙なことでー」

「何じゃと、早く申せというておるに」

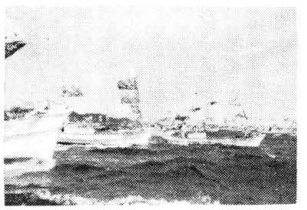
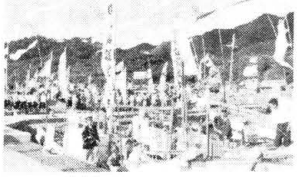
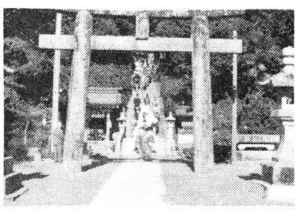
「申し上げまする。黒川の庄のあたりでいろいろ取沙汰されておりまする。つまり、殿が御謀叛を企てていることを大殿が聞き込まれ、あろうことか、豊州勢（大友方）を語ろうて殿を征伐するとか申しておりまする」

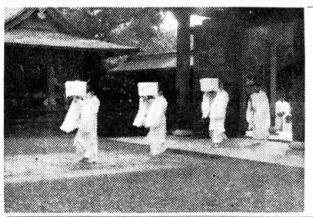
「ふむ？」

つづく。

第二回目の御生祭

―神湊海浜に三宮が御駐輦―



復活第二回目を迎えた御生祭は写真の通り盛大に行われた。

上段右端
午前九時、これより奉遷する由を大前に申し上げ、中津宮、沖津宮の神璽を奉戴して中津宮参道を下るところ

上段中央
大島に入港して神璽の御到着を待つ七浦連合艦隊、紅白の幡旗、大漁旗が風にはためいている。

上段左端
玄海灘に乗りだした渡御船のスナップ。波のうねりが大きく、写真撮影の神職は、乗組員二人からしっかりと支えられて写した由。風が強く、のぼりをつけた竿がしなっている。将に天気晴朗なれども浪たかしである。

中段左端
神湊海浜に設けられた御駐輦の風景である。神湊観光協会、旅館組合等が協力され、この祭の為大提灯を奉納された。御駐輦は午前十時より午後の五時まで

中段右端
午後五時バトカーを先導車として神湊を発した自動車による御神幸、先頭が辺津宮、次が中津宮、沖津宮の順で、郡内タクシー、各協賛の供奉車が続く、車数凡そ三十台。

下段
辺津宮着御になる三宮の御神璽、時に午後五時二十分、これより本殿に於て着御御生祭を斎行して無事御生祭は終了した。

開場された玄海ゴルフ場

変貌する宗像

世は挙げてレジャーブーム、いやそれは昨年のこと。今年はバカンスなのだそうだ。何んでも余暇を楽しむのではなくて、積極的に休暇を造り出し善用する事なのだそうだ。それは兎も角、有産階級のスポーツと称せられているゴルフも休暇善用バカンスの範中に属するのかも知れない。このゴルフを宗像郡内で楽しむ事が出来る様になった。勿論只ではだめだ。入会金一名五十五萬円也を払えばの話である。処は宗像郡玄海町江口。玄海灘が一望に収められる松林に囲まれた砂丘の一帯である。坪数は約二十四万坪余と云われる。現在既に工事を完了しており、九月二十六日からオープンになった。

この鄙びた海に面した砂丘帯に突如としてゴルフ場が出現したがこの計画が実現される迄には六年程の歳月が過ぎ去っているのだ。

水利には余り恵まれぬこの地方に昔から大きな産業は発達しなかった。近年の工場誘致についても水利、水質の問題、交通等の諸問題がハンディとなって仲々容易に実現しない。然し、この地方に育って地元発展の為に尽したいと念願していたA氏は、この北九州の海岸線を色どる松並木の景観を生かした観光事業をと思い立ったのがそもそもの始りであったと云う。

斯くして、プロゴルファー数名が来宗して現地を視察し、ゴルフ場として充分な条件を備えている事が実証された。そして三菱鉱業他十数社の協力を得て資本金五千万円を以って西日本開発株式会社が設立されたのである。

広大な土地を必要とする事業はいずこも土地買収の難関につき当っているが、この江口に於ては地元関係者の協力によってスムーズに事が運び、工事着工が昨年の十月、完工が本年の九月と約一カ年足らずのスピードぶりであった。

設計、工事監修は関西プロゴルフ協会、施行は新菱建設があたった。ここで、同ゴルフ場のコマーシャルを紹介しよう。

コースは北は地ノ島、大島等玄海の島々を眼下に望み東、南は紫の山並みに囲まれ西は釣川をへだてゝ神湊、津屋崎へひらけた景勝の地でゆるやかな起伏に恵まれ且対馬暖流の影響により無霜地帯で雨、雪もすくない一年中快適なプレーを楽しめる、ゴルフ場としては理想的な環境地形……なのだそうである。

会員は、募集中であるが、北九州市と福岡市の両方から次々と応募があり、近く〆切るとの事である。

ゴルフとは小さな白い球を長い柄のついたヘラでただき飛ばすスポーツらしい。これを実行するのには、例えば事業家には事業上の、政治家には政治上の迂余曲折があっての事も多いらしい。それはそれで大いに結構。

さて、大社の或る職員曰く

「ゴルフ族は自家用車族が多いに違いない。さすれば、交通安全祈願をしっかりとやらんと、多分ゴルフもうまくいかんじゃろう」

なるほど、という声がした。

× × ×

宗像談話室　神様とテレビ

近頃、心ある人たちが、神社や民族の在り方についてかれこれいうようになった。多分に時代を反映しているといえよう、殊更にとりたてて云々しているようには思われないものがあることはかえって喜ばしい。これは段々と本来のよさが自覚されて来ていることの証左と見る事ができるのではなかろうか。

こんなことが今年に入ってからテレビに散見した。正月であったか、「チロリン村とくるみの木」という子供向けのものの中に村中が鎮守のお宮参りをする処があった。

「家内安全、村内安全、みんな仲よく平和に暮すように、抜い給え清め給え――」

白髭の神主がこんなことを云って「こへい」を振り廻しているところがあった。この児童劇の作者が、どこまで神社神道についての認識を持っているかは知らない。しかし神社神道を特にPRする為に氏神さまを持ち出したとは考えられないから、固有の民俗風習として自然に出て来たものに違いない。そしてこの内容が氏神様の神主の在り方としては万点であることが微笑ましく思われた。

この夏頃、「咲子さんちょっと」というテレビのホームドラマで、京太郎という息子が外遊することになるかもしれないという場面があった。その時にその母親が息子の旅行安全を祈って八幡様のお守をいただいて来た場面があった。その事が世の母親の至情を表現する為に、誠に無理なく至極当然のことに視聴者には受け取れる。或いはこんな事も、誰にでも特に意識にとどめられる性質ではないかもしれない。だがこの事実を裏返して考えてみるならば、日本人の誰でも特に意識する必要が無い程に生活に融け込んでいる習俗であるということが言えるのではなかろうか。

更に最近のことである「往診休診」という有島一郎演ずる所のホームコメディに於て、医師であるところの彼が述懐する場面がある。

「日本はあらゆるものを失ったが、たった一つ残されたいいものは〝お祭り〟だよ　お祭はいい」

というような事を云った。ところが若い娘が父である医師に抵抗する。

「お祭なんか好きな人たちだけでやればいいんだわ。私たちにはカンケイない」

こういって学期試験の勉強がお祭り騒ぎの為に防害されるのをぼやく。処がその娘さえも終には浴衣を着て御神幸の御神輿を見る為に出かけて行く、という設定になっている。

それらが矢張り一つの固有のムードとして視聴者の共感を呼ぶ結果になっていた。

テレビの三つの例が気になって、ここ暫く考え続けて来た。そして一つの結論に到着した。

要するに、戦後の神職は沈滞してしまって、活発な社頭の活動をやっておらない者が多いし、また一般の道徳教化活動の中心にさえなっていない者が多い。それにもかかわらずテレビドラマ等に固有の信仰習俗が生きているということは、神職の活動とは或いは殆んど関係もなく、一般国民が守り続けるものは守り続けているのだ、という事実ではなかろうか、ということである。

神社本庁は一体これらのテレビドラマの作者に対して何らかの手を打っているであろうか。――いやしかし待てよ、そんなことを意識的にすると、かえってニオイの強い面が露出するかもしれない。そっとして置く方がよいのかもしれない。自然の流れが間違っていないことが判った以上、神社対氏子の関係は、根本的には大丈夫だという信念を神職は持つべきであり、それをシンにして神職自体の活動をしなければならないのではなかろうかとも考えた。人を信じ、自ら迷うことがあってはならない。

テレビを見て教えられ、反省させられるところが多い此のごろである。

町村往来

◇宗像町青年団社会視察…15日午前7時半出発、唐津鏡山へ。約百人が参加。

◇観月登山会員を募集…福間町登山会は10月28、29両日、粕屋郡篠栗町「しょうけ越え」でテント野営を実施する。

◇運動会…15日城山中、福間中津屋崎中。

◇としよりの日行事…15日午後2時、宗像町朝町嫁・姑（シウト）会の懇談会、朝町公民館分館玄海町池野校区婦人会は正午から池野小で敬老会。同日はその他各地区で部落や婦人会主催の敬老会があった。

◇子供会リーダーの交通教室…宗像町田熊の県子供会研修隊宗像第十四隊のこどもたち二十二人は15日午前9時から宗像署で交通法規や交差点での手信号などの勉強をした。近づいた秋祭りの交通整理の手助けをするための勉強

◇共同募金…郡内で九十五万七千五百五十七円の割り当てがあったが、各町村の割り当てはつぎのとおり。▽宗像町三十五万九千二百五十三円▽福間町二十五万千九百三十四円▽津屋崎町十七万八千三百四十二円▽玄海町十三万四千九百四十四円▽大島村二万七千八十四円。

◇銃砲刀剣類の検査…宗像署がつぎの日程（午前9時―午後4時）で行なう。▽18日＝宗像大社清明殿（玄海、大島）▽20日＝大和公民館（福間）▽23日＝青年研修所（津屋崎）▽29日＝宗像署会議室（宗像）

◇宗像教育会館落成式…18日午前11時、宗像町東郷魔利支天神社横の現地。同教育会館は郡内の教職員が一人約五千円を負担してこのほど第一期工事を終わった。敷き地五百八十平方メートル、木造平屋百六十五平方メートル。事務室、会議室などがある。

◇しゅうとの会…19日午後8時半、津屋崎町大石分館「しゅうとのなやみ」の映画を上映、そのあと『老人と若い者』をテーマに話し合う。

◇福間町議会…20日午前9時追加更正予算二千八百五十七万円を審議する。

◇津屋崎町バレーボール大会…22日午前9時、津屋崎中グラウンド。町内親善のため開く。各部落から合計二十チームが参加。津屋崎町教委主催、西日本新聞社後援。

◇老人検診…宗像保健所と玄海町は老人福祉法の制定にともない、このほど同町の六十五歳以上の老人八十一人の検診をした。その結果は高血圧症が多かった。

（西日本新聞より）

―生魚料理―
割烹旅館
新築改装
魚屋旅館
宗像郡玄海町神湊
電話神湊22、24番

宗像伝説　其の三十二

野坂の間道

時は明治維新直後の頃である。宗像郡の野坂に農業を営む元三という者があった。この元三が五十四才になった時に考えた。旧幕時代は公役免除の停年は六十才であったが、今の明治になってからはそれが五十才になった。本来ならば六十才迄の六年間は公役に服さなければならない訳だから、ここはどうでも御奉公しなければお天道様に申し訳がない。かねてから原町から野坂を経て鞍手、山口に出る間道が狭いので人々が難儀をしている。あれを広くしたならば牛馬の通行も出来るし、どんなに便利になるかわからない。よし、終生の御奉公にあの間道を開懇してやろう。

こう考えて、彼はこの間道の実測を行った。長さは百二十間（およそ二百三十米）あった。そのうち半分は元三の所有地、あとの半分は他人の所有地であった。これもこの道を広げる目的を話してよく頼んだらほかの地主は承諾してくれるに違いない。こう考えた。

幸い、地主たちは快よく承諾してくれた。あとは実行あるのみである。

さて野坂村は大きな村であったので、元三と同年配の者が沢山いた。そのうち、比較的貧乏な者三人に相談した所「我らの労力提供で済むことならいと易きこと」と承知してくれた。これに力を得た元三は村長に対して間道開懇の願書を差出した。

ところがその願書が仲々許可にならない。時の村長中村清三は丁度元三の甥に当っていたので、一体どうした事かと催促した。

そこで元三は一つの障碍に打ち当った。つまりこうである。

村内には五十年令の人が多い。これを実行するとすれば、その趣旨の上からして多勢の人の労力奉仕を強いることになる。そうなれば皆の賛成を得られるかどうかわからない。中には強硬に反対の為の反対をする者も居る。それが村長の許可をしぶらせている原因であった。

甘蔵という者がいた。この者に村長が内意を含めて元三に思い止まる様に話させようとした。処が甘蔵は分別のある人であった。そのことをそっくり郡長の耳に入れたのである。警察に伝わり、次で東京日日新聞の紙上にも元三の計画が掲載された。さあ、事が大きくなってしまった。郡長から「元三が願書早々に差出すべし」という命令が下った。村長は慌てて願書を差し出した。

願意は早速聞き届けられた。元三と三人の仲間は直ちに工事に着手した。工事といっても人力でやることである。仲々はかどらない。数十日で間道の前後は完成したが、中央部は難工事である。

村内では、元三ほか三名の発企であるから誰も加勢すべからずという訳で誰一人として助勢してくれない。下手な意地を張って人の善意ある行為を羨望し、又殊更に冷淡視した訳である。今も昔も「自分を立ててくれるのでなければ」と、勝手に威張りたがる尻の穴の小さい人間がいるものである。

元三ほか三人は鳩首相談した。そして夫々他郡の親戚を呼び寄せる事とした。一挙に数十人の加勢がまとまり、あとの難工事五十間のところは一日にして完成した、という。元三たちは県庁から褒賞された。清貧者のまごころを伝えた道は今も立派に役に立っている。

（H）

宗像大社献詠 俳句作品集(十三)

津屋崎　西住喜三郎
雨の蟲廊下の足音盗み歩す
〃　毛利　夜潮
お上りの後の御遷座蟲時雨
〃　久羽　文王
風のむき変れば聞ゆ祭笛
〃　占部　河童
子に語る星の神秘や夜の秋
〃　渋田史外男
水飴を舌にとかして夏果つる
〃　岩見佳代子
わが胸を占めし人去り夏終る
〃　井浦　良介
夏老ゆる海辺に夜の風訪れ
〃　香立喜一郎
客車の灯闇に潜りて星流る
〃　安部真佐子
入道雲重なり谷間のバス揺れ出す
〃　大神　寛
銀漢にフルート吹いて天馬呼ぶ
〃　吉野　享志
求めしと走る子等に野菊の花
〃　勝田　光一
月下の蝶いのちしずかに燃えたゝす
東郷　小野　淡坡
秋桜台風はげし垣根這う
〃　小野　花居
紫鶏頭足とどめ行く門の内
福間　城野　茎雨
秋水に切口見せて竹流る
〃　城野　清子
百合の香に眠りて夢になやまさる
山口　篠田南洞城
栗袋どさりと土間に女中戻る
沖ノ島　前田斎之助
背延びして迎へ船待つ秋の碧

企業に於ける人つくり (三)

出光佐三

二　日本人として恵まれていた私の生い立ち

――学生時代、それから丁稚奉公、そして独立まで――

伊勢神宮が皇室のご先祖をまつったものであるなら、宗像神社は国民の祖神であるといわれるくらいに格式の高い、お伊勢さんと表裏一体の神様なのです。私がこどものころ、われわれの地方は非常に民風、地方風のいいところで、そして小学校の名校長、名教師を出すので有名であった。私のこどものときにいちばん尊い人は学校の先生でありましたが、これは宗像神社のご神徳によって醇風美俗ができ、名校長が輩出するのだというふうに教わり、こども心に神というものがあることを知らされておったのです。一方、それと反対に、この非常にりっぱな地方に、毛虫のごとくきらわれる悪い人が二、三人いた。そしてそれらの人たちのことがこどもの耳に入ってきて、あれは個人主義の人だ、権利思想、自由思想の人だ、それでああいう悪いことをするんだということで、非常にきらわれていた。これはいまから考えれば、そういう思想というものは悪いんだ、日本がいいんだと、こういうふうにおぼえてきたわけなんです。

それから私は神戸の高等商業に入りましたが、ここでまた同じような教育を受けた。と申しますのは、神戸から大阪の市場を見ていると、これはもうカネ万能のところであって、ことに日清戦争で勝ち、日露戦争で勝って、財界ブームが起こっていて、カネの力が極度に過信された時代であります。カネの力によってすべてを決するというのが大阪の市場でありました。投機をやって儲ける。消費者に高いものをだまして売ってカネを儲ける。あるいは生産者のものを買い占めて消費者に高く売りつける。そういうことをやることが商売であり、商売はカネ儲けであるとされていた。そしてそのカネを持っておる金持のやっておることといえば、青年学徒から見て、じつにけしからん。「なんだい、金持は」というような憤激を感じたんです。それでわれわれ学生の仲間では、「黄金の奴隷になるな、カネがなんだ、われわれは人間中心だ、人間が社会の中心にいなければならん、人物本位だ」と

いうようなことを言った。それが私が今日唱えておる人間尊重ということになっているわけです。その意味で大阪の物質中心、カネ万能の実態を見せつけられたことによって今日の人間尊重の良い基礎を与えられたことになるわけです

それから学校の水島校長、この方は正金銀行に入られてニューヨークの支店かなんかにいられるときに病をえて教壇にかえられたわけですが、外国の実業界も、日本の実情も実際によく知っておられるりっぱな方でありました。この先生が家族温情主義というのを唱えられ実行された。その当時はすでに京都大学に河上肇博士なんかがおられて、社会主義が相当高唱されている時代でありましたから、家族温情主義ということは、資本家が従業員を搾取するためのずるい看板であるというようなふうにいわれておった。それで家族温情主義を口にすることはみなが多少遠慮するような時代であったにもかかわらず、水島先生はなんら遠慮なくこれを唱えられてこれを実行に移されたのです。実行に移されたからよかった。これが口だけで唱えられておったならば、社会主義者からひどくやっつけられたんだろうと思うのです。どういうふうに実行に移されたかといえば、私ども学生を、学生時代から自分の家に呼んで、家庭の事情、それから学生の希望、性格などをよく調査されて、そして就職の世話をされる。就職してのちも、ときどき呼びつけては「どうか、仕事はおもしろいか」というようなふうに、ちょうどほんとうのお父さんがわが子を見られるような親切な態度で、われわれに温情をかけられた。若い先生にたいしても同じことである。それで卒業後、私どもの同窓会をやっても神戸の高商の同窓会はどうしてあんなに家族的なのかと、ほかの学校の人がうらやんだのですが、それはまったく水島先生の家族的温情主義のたまものである。こうして私は、人間というものは愛によって育つ、人間中心、人間尊重のその尊重すべき人間は愛情によって育つという呼吸を覚えたのです。

それから次には内池廉吉博士、この方は四、五年前亡くなられましたが、配給論、倉庫論の先生でありました。これは私はレクチュアで聞いたのではなく、なにかのスピーチで聞いたのですが、先生はまず、「こんご商人はなくなる」、こういうことを冒頭に言われた。商売人になろうとしている私にとっては、まさに青天の霹靂であった。ところが先生はさらに言葉をついで、「投機によってカネを儲けたり、問屋なんかのように中間搾取をやるいわゆるカネ儲けが商売であると考える、そういうような商売人はなくなるということであって、生産者と消費者をつなぎ、真剣にその間に介在して両方の利益をはかる、このような商人は絶対に残る」。こういうことをおっしゃった。私はそのときに、これだと思った。

× ×

――宗像藪庵先生百話――

シンガポールの日本人医師 (三)

宗像太郎坊

ドクトル・オサケ。

これはもっと昔の話である。いんちき医師や越中富山式の薬売りは、ちょいちょいマレーやシンガポールにいた事があるが、正式の医師として開業したのは、中野ドクトルが草分けである。彼は福岡県久留米市の出身で、五尺そこそこの小男であったが、中々の豪傑で酒豪でもあった。

日清戦争後、長崎医学校（当時の第五高等学校医学部）を卒業し、明治二五年、上海に渡り、荒尾精氏に私淑し、日清貿易研究所の豪傑連と交友し、盛んに南洋雄飛を鼓吹され、翌年二月、郵船ボンベイ航路の第二船、広島丸で印度へ航く宇都宮太郎、松石安治の両大尉と同船し、聴診器一本下げて飄然とシンガポールに上陸し、ホテル・ドラッペルに泊ったのは明治二七年春のことであった。当時シンガポールの邦人男子は数える程しかおらず、その中で頼りになるのは、三井物産支店長代理の犬塚信太郎、小田柿捨次郎と友常和仲と、それに大和商会の国井藤兵衛ぐらいであった。

その頃、ドイツ人医師の勢力が非常に強くて、いきおいこの医師達と競争せざるを得ず、彼等から随分意地悪い妨害も受けたが、中野先生は屈する事なく、次第に日本人医師の真価を認識せしめるようになり、明治三七年には、人のすすめにより、コーランポに分院まで開いた。これがマレー半島に於ける日本人医師開業の初めである

彼はまた、タイ国に公使館を設置する事にも一役骨折った。その頃、「東方策」を書いた稲垣満次郎がシンガポールに来て、三井の社宅に居候をきめ込み、領事館の二人と、三井の三人と、華民保護局の通訳であった二宮と中野ドクトルのたった七人を聴衆にして、長広舌を振い、一週間もしゃべり通して、南方経略の急を毎夜深更まで説き続けた。然し稲垣氏が南方の果で七人の聴衆を前にして熱弁をふるったのは決して無駄でなく、斉藤領事が先ず感服し、ともどもタイに公使館設置の急を外務省に訴え、明治三十年、バンコックに初めて日の丸を翻すことが出来るようになった。この稲垣氏が実に初代の公使として、中野ドクトルを同伴、意気揚々とシャムに乗り込んだと云う一頁がある。

また中野宅は同志の集合場所のようになり自由党の名士、朝鮮事件の首魁だった馬城大井憲太郎が来て厄介になった事がある。中野は酒を呑むとだんだん天下を取ったようになり、次ぎの人達の事を得意になって話した。明治三四年に宮崎滔天、内田良平、藤崎某の三人が来て、旅館に泊っている時、現地の巡査が包囲して追放した事や、四十年に大江卓と奥宮健之がネパール王と共に碩田館に泊ったこと、伊藤博文、粟野慎一郎に二回も逢ったこと、一番印象に残るのは、東郷、乃木の両大将が寄港した時の事を、右手に杯を持ったまま、酩酊朦朧として語っている姿であったと云われるが、この先生も大地の物となって早や四十年になる。

ついでに中野先生以後の医師の事を一寸、書いておこう。次に来たのが、幸徳事件で断頭台の露と消えた大石鉄之助である。彼はシンガポールで開業したが、一年ほどでボンペイへ行き間もなく帰国した。この他、初めに書いた西山竹五郎（仮名）、この人の書生某が「千金丹」という薬を売り歩いて大儲けをした。ジャワで六カ月も廻って帰ると、四千ギルダー位い持って帰ったという。又、佐藤有太、大貫公光、医学士安達昌平あり。コーランポに佐竹逸蔵、市原雲新、宇野瀧之助。スレンバンに高木亀太郎、イポーに松竹勝次、ペナンに石井六郎がいた。更に歯科医では、シンガポールの山本作次郎が草分けである。薬店では回生薬房、江尻殊弘薬房があった。

色々、昔の事ばかり書いたが、時々記録を新たにしておかないと永遠にわからずしまいになり、過去の事はゼロという味のない人生になって了うからである。

座敷へ来てワイく騒ぎ出した。之では喧嘩を売りに来た様なものだ。黒田はたまらぬ、終に癇癪玉が破裂して褌を踏倒して飛び込むなり岡本を殴りつけた。岡本は「己れ無礼な奴じゃ」。そこでドタンバタンの組打ちとなった。芸者は三味線を抱えて逃げる。楼婢は杯盃を取り片付ける。唯一人として仲に這入る者はない。彼是する内岡本は黒田に組み伏せられたがたまらないから黒田の睾丸をグイと掴かんだ。流石の黒田も痛さに堪えず岡本の耳朶へ喰付いた。強情な二人は一方は睾丸を締めつける一方は耳朶を喰えて引張る。その内黒田は睾丸を強く締付けられて気が遠くなった処へ楼中総がゝりで双方を引分けた。その場はそれで済んだが翌日になって岡本は黒田に喰付かれた耳朶が出血、腫れ上ってその痛さは一通りでない。医者を呼んで手当をしたが数日間外出を禁ぜられ、発熱もあって苦んで居る。そのことが黒田に知れたと見えて、黒田から見舞の者が来た。岡本は不思議に思って尋ねると大変な別嬪さんが見舞に参上。之が意外千万にも芸者の小清であった。「ヤア汝は小清じゃないか」「ハイ黒田のお前さまの使で参りました。之を御覧下さいまし」差出した手紙を見ると斯く云う風な意味の事が書いてあった。「先夜は酩酊失礼、その后聞けば拙者が喰付いた耳朶の為め苦んで居られるとの事、何とも気の毒に堪えぬ。就ては此者を看病人として差出すから御遠慮なくお使い下さい。しかし小生の睾丸至って壮健お役に立つ御安心下さい」その手紙に同封して小清の前借金の目録が這入って居た。察するに黒田が小清を身受けして岡本への贈り物としたらしい。之を見た岡本は思わず額を押えて「ヤア失策った俺は矢張り黒田には及ばなんだ」と云って笑った事があった。明治の頃には時折り面白い話がある。それから黒田と岡本は親密なる交際が続いた。

日本の民主々義

戦前の場合（その九）

天野健一

言わずもがなの一言

古えの高僧の一人に達磨大師がおわす。だがダルマとはサンスクリットで dharma。これを法と訳す。法とは何か、宇宙万物に通ずる真理と答う。この法に立って人生を観ずる。あるは色と云い、あるは空となす。要は心だ。座禅して深思冥目するのはこれの鍛錬に他ならない。神道ではこの在処を祓いによって尋ねた。心次第で其身は菩薩にも仏にもなる。中世、神仏一如の思想はここに在ったと色紙のダルマがささやいた。

（菩薩にはあらねど我も仏なり）

（一面よりつづく）

戸畑　花田　道子
陽のほてりこもらふ部屋にいねに来てネオンに静もる街々を見る
村山田　金丸　柳蔵
荒れ狂ふ嵐は庭の柿の葉も実も吹きちぎり持ち去りてゆく
津屋崎　勝田　光一
入り海の北の一角占めて立つ森山月をはらみて妖し
深田　中野　節子
昨夜喰みし西瓜の残りに幼なげに虫の鳴きゐて厨明けそむ
田島　小野　迪夫
秋日中揚水機の音轟けば事多かりしを思ひて目守る
吉武　原田　リノ
這ひ来たる南瓜の蔓に巻きつかれよろめく菊に竹の杖やる
香椎　桜井　秀
うつそ身の人の願ひのさまざまに染みてや古りし剥落仏
〃　桜井　ツ子
ちらちらと籬に人の訪ふ気配目守れば白き蝶のとびゐる
吉武　立石　昇
二人居の広き家居も夏くれば孫ら来りて十七人となる
吉武　立石ろせの
バス停に捨てられし猫拾ひ来て孫は終日抱きて遊ぶ
吉留　山下しづえ
由緒ある宗像大社の御神木楷の木蔭にしばし佇づむ
田島　宇都宮　淳
いつのまに秋になりしかしぐれさへ昨日に変り今日静かなり
〃　斎藤　惇
赤とんぼ穂波の上を光り飛び竿振りて追ふ子らの声する
〃　白雲　山人
そのかみに暗君ありし城と聞く天主声なく月はのぼりぬ

お知らせ

かねて皆様から御要望のありました「宗像」の表紙カバーが出来上りました。御希望の方は送料共二百円でお頒ち致します。紺色で表紙には、金文字で宗像と入れてあり美麗なものです。本紙を綴じておくに便利です。

我楽苦多告知板

〇頃は七月の初め、女子店員A子嬢が面白い提案をした。これから「暑い！」と言った人から〇〇円（実価は特に秘す）を徴収したらいかが？。之を聞いた面々、自分に限ってそんな（損な）事は言わないぞとばかり全員賛成。かくて特別立法は可決。もの好きな男がいるもので、早速徴税の箱を製作した。この特別税法制定のお蔭で、毎日バリバリとヘソクリを取られる事しきり。三七日が過ぎると、これに懲りて「あー……」とも言わず税金はバッタリと途絶えてしまった。ところが、意地の悪い奴がいて誘導尋問をやらかす、「おーいB君、B君の処は山の蔭だからしのぎ良いだろうね！ビールでも御馳走になりに行こうか？」。そう易々と御馳走になりに来られてたまるものか…と「いやいや、我家も暑いよー」、途端にどうぞお納めを…

かくして、積り積った貯金箱を先頃御開帳、お菓子を沢山買って過ぎし夏を懐しみ、ほろにがい秋の風味をかみしめたとか噛みしめなかったとか。――いやはや。